

令和5年度 学校経営報告書

八王子市立浅川中学校
校長 市場 陽一郎

学校経営の基本方針

◎校訓「誠実・自律・調和」の精神を基に、

愛情・誠意・忍耐をもって学校全体が一体となって『丁寧に』指導、支援を行う

・生徒の「生きる力」を育む学校 ・教職員が充実感を持てる学校 ・保護者・地域に信頼される学校

◎「人と人との関わりから学び合い、社会に貢献できる生徒の育成」

・学び合う授業づくり ・優しいクラスづくり ・協働する行事づくり ・主体性につながるあいさつ

教育活動における自己評価 現状と課題

○総 括

今年度も「人と人との関わりから学び合い、社会に貢献できる生徒の育成」を目標に学校全体で「認め合い、学び合い、高め合う力」を身につけさせるための教育活動に取り組んできた。生徒アンケートに見られるように、人権教育の推進を肯定的の評価する生徒が94%となり、過去5年間で最も高い割合となった。生徒、保護者共に落ち着いた学習環境、生活指導の評価は85%以上が肯定的であり、校内は大変に落ち着いた状況である。また、87%の生徒は本校のいじめ対応を評価しており、保護者アンケートの「分からない」の回答も13%に減少した。

主体的で深い学びの獲得とより良い人間関係の構築を目的に「学び合う授業づくり」への取り組みも3年目となった。年3回の大研究授業、3回の学年単位の中研究授業、オンラインでの全国的な研修参加で教員の真正で深い学びへの意識も向上してきた。

GIGA スクール構想・一人一台PCの活用も生徒に定着しつつある。今あるけじめある安定した学校生活の中、次年度もより主体性を発揮する生徒の育成を意識し教育活動を進める。

○生徒の現状と課題

仲間を思いやり穏やかに学び合う生徒が多い本校であるが、自ら進んで行動できる生徒の育成が今年度も課題として残った。

特性を持つ生徒、支援の必要な生徒が散見される。その中で、課題である不登校生徒への対応、未然防止に一人一人に寄り添う生徒理解を基本に、生徒同士が支え合い学び合う学級づくりに取り組んだ。道徳や特別活動、体育祭、音楽祭、移動教室、修学旅行、日本遺産高尾山学習も含めあらゆる場面で人と人との関わり方の重要性を意識させた。指導目標の一つである「人と人との関わりから学び合い、社会に貢献できる」生徒の育成を目指し、引き続き学び合う授業づくり、学級づくりに学校を挙げて取り組む。

○教職員の現状と課題

服務全般については、規律を遵守し勤務している。授業や特別活動において生徒理解に基づく丁寧な指導を心がける教員が増え、保護者、学校運営協議会からの信頼も得てきている。しかし、一部に見られる生徒への配慮を欠き、誤解を招くような指導には改善が必要であった。次年度以降も現状に甘んじることなく、生徒主体の自己有用感を高める指導を行い、生徒の人格を尊重した指導を学校全体で推進する。

○家庭・地域の現状と課題

学校運営協議会委員、PTAと連携し、コロナ禍後の修学旅行、体育祭、音楽祭、福島移動教室、校外学習や日本遺産高尾山学習等を制限をかけずに実施できた。今後もより多くの保護者、地域から協力、支援をしてもらえる信頼関係づくりを推進する。

今年度の取り組みと(成果及び課題)次年度に向けて

1 自ら学び考え行動する生徒を育む ―学力向上、基礎・基本の定着―

- ① 学び合う授業のスタイル(コの字座席、4人班、男女市松模様座席、毎時間一度はグループ学習)は定着した。生徒の90%以上が肯定的に捉えている。その質を高め、深い学びにつながる課題提示は試行錯誤の状態であるが、授業改善は進んでいる。主体的で対話的な深い学びの探究は教科によるばらつきはあるものの校内の意識は高まってきた。「学び合う授業づくりプロジェクトチーム」を中心に、國學院大學齋藤智哉教授を招き、校内研修を年3回実施できた。また、昨年度と同様に全国的な授業研究会へのオンライン研修参加を行うことができた。来年度もより主体的で対話的な深い学びに向けた校内研究授業を年6回計画し、授業改善を推進する。
- ② ノーチャイム始業の取り組みは定着し授業規律は年間を通して高く維持された。次年度は学力向上のベースとなる生徒の自律及び自己指導能力を更に向上させていく。
- ③ 生徒授業アンケートでは正規教員の授業評価得点(4点満点)は全員向上し、平均点は3.7点を上回った。市学力調査では1年生は国語、数学共にD層を約5%引き上げることができた。2年生は前年度と比べ国語4.9% D層を引き上げた。数学に関してはD層が1.7%増となったがA層は7.6%増であった。次年度は、基礎学力の定着に課題のある生徒への個別の指導・支援に取り組む。
- ④ 基礎学力の定着と学習意欲を高めるための補充学習「てらこや」「Eステップ」を数学、英語で部活動として実施したが、参加生徒が減り個別支援の必要な生徒の参加を促し学力を上げるための実施方法の変更を検討する必要がある。
- ⑤ 定期試験直前に試験対策放課後質問教室を全校で実施した。教職員の負担軽減にもつながり、一定の成果があった。次年度も実施を予定。
- ⑥ 朝読書の励行は生活指導面でも好影響をもたらしている。学校図書館の開放、推薦図書のお知らせ等々、学校図書館司書と地域ボランティアの連携で、読書活動の充実を図った。朝読書の時間に週一回はクロムブックによるミライシードに取り組む時間として定着した。
- ⑦ 浅川小学校との小中一貫教育、その連携は進めることができた。小中合同の学び合う授業づくり研修として中学校研究授業参加、男女共同参画意識向上のための連携、音楽祭りハーサルの見学、小学生授業体験・部活動体験を実施できた。小中相互の夏季学習会でのボランティア活動を行うことができた。今後も郷土学習、9年間での学力向上などの情報交換、共通理解を図りながら連携を推進していく。

2 豊かな心を持ち、思いやりのある生徒を育む

- ① 道徳教育は、ローテーションにより学年所属教員全員で授業を行った。対話的で議論する道徳を学び合う授業づくりの一環として行うことができた。また、特別支援教室巡回指導教員による小集団授業を通常の学級で行い、自己理解や多様性を認める共生社会について学ばせることができた。
- ② 「学校林栗山環境教育年間計画」のうち、今年度は、1年生のくりやま散策、講演会、下草がり、シイタケの菌打ち体験を実施。近隣保育園や浅川小学校の環境教育の場としては受け入れ実施した。栗山環境整備、くりやま学習の持続可能な運営については依然として大きな課題となっている。地域ボランティアの発掘、連携を行っていく。
- ③ いじめ対策、特別支援校内委員会を毎週実施できた。また、生活指導部会を週1回実施し、情報交換だけでなく、問題を分析し、組織的な対応を行うことができた。また、スクール・ソーシャル・ワーカーとの連携も進めることができた。
- ⑤ 学校評価における「学級は落ち着いて学習できる雰囲気である」の結果は肯定的評価が生徒83%になった。生徒指導上の非行性、不良性による課題はほとんどなかった。しかし、集団不適應等内面的な悩みを抱える生徒が増加して不登校になる一つの要因となっており、対応が必要である。校内特別支援委員会を中心に今後も組織的に粘り強く指導・支援していく。また、全学年でQu研修を2度実施し、学年分析会を行い、生徒の見取り、集団の見取りについて話し合った。「もっと優しい

学校」を目指して、更に教員の生徒理解への意識改革を進める。

- ⑥ 1年生対象のいじめ防止プログラム、教員対象のアンガーマネージメント研修、弁護士いじめ授業、赤ちゃんふれあい授業、男女共同参画を意識したアンコンシャスバイアス講演会、障害者理解授業、がん教育での学びを人権尊重教育、命を大切にする授業として行った。
- ⑦ 本校のオリンピック・パラリンピック教育のレガシーが「ボランティアマインドの育成」であることが理解されていなかった。今後、学運協や地域と連携して、ボランティア推進として取り組む。
- ⑧ 郷土学習として日本遺産学習に取り組み、その成果を日本遺産フェスタで発表することができた。

3 心身ともに健康で、たくましく生きる生徒・自分や学校を誇れる生徒を育む

- ① 校訓「誠実・自律・調和」を生徒に意識させることができた。(認知度の向上生徒 91%、保護者 85%)
- ② 部活動において全教員が顧問となり、複数顧問体制がとれた。部活動の在り方に関するガイドラインに沿って、適正に運営できた。「部活動による人間形成」を目標に一層の充実を図る。また、八王子市部活動改革に向けて外部人材等を活用し、段階的に取り組んでいく。
- ③ 生徒朝会、コの字型座席での生徒総会、いじめ防止かるた大会、あいさつ運動、「アサテン」浅川中作品展覧会を生徒の力で実施し、生徒が主体となる生徒会活動を行うことができた。
- ④ 「み(身だしなみ)・そ(掃除)・あ(挨拶)・じ(時間)・は(話を聴く)」運動が定着してきた。今後、自分から行動に表せる生徒の育成に力を入れなければならない。特にあいさつは生徒会や保護者、地域と連携して意識を高めたい。清掃活動への取り組みは更に主体的なものとしていく必要があり、今後の課題として捉えている。
- ⑤ 学校行事等でリーダーの育成を進めた。体育祭、音楽祭、音楽フェスタでは学校全体が一体となって取り組む姿勢を保護者、地域の方から高い評価と学校への信頼を得ることができた。そのことが生徒の自己有用感を高め、自己指導能力の育成につながっている。自治力、自主性を含め「強く生きる力」を身につけさせるため、今後とも特別活動、学校行事を充実させる。
- ⑥ 不登校生徒への対応は大きな課題である。別室指導体制づくりは進み、担任も懸命に対応しており保護者との関係も悪くはない。しかし継続的な登校までは進んでいない。初期段階の傾向(学力不安、対人関係、家庭環境等)や対応について校内委員会、特別支援教室指導教員と連携して分析検討して対応する。保護者への支援の必要性も感じる。外部機関、スクール・ソーシャル・ワーカーとの連携や保護者と教員が共に取り組む仕組みづくりを考えることが必要である。

4 教職員が生徒のために全力を尽くす・教職員が一丸となって実践する

- ① 授業改善や授業力向上のための学期ごとの大研究授業、冬期休業中のオンラン全国研修参加等を実施した。次年度も学び合う授業づくりプロジェクトチームを中心に校内研究授業を6回以上行う。GIGA スクール構想、日本遺産学習もプロジェクトチームを軸に全校で取り組んでいく。
- ② 各学校評価を学校運営協議会評価部と連携し、7月、12月に実施し学校改善や授業改善に生かすことができた。(学運協、地域関係者による学校評価委員会5月、9月、2月開催)
- ③ 主幹、主任による若手教員へのOJT研修を全体では一度行った。次年度はより一層、高い意識を持って取り組みたい。
- ④ 学び合う授業づくり研修、特別支援教育研修を通して、生徒理解に基づいた指導の重要性を再確認した。次年度も年10回以上の校内研修(小研究授業、事例検討会等を含む)を実施し、指導力(学習、教育相談)の向上を目指す。
- ⑤ 現時点では、教職員の服務事故ゼロが実現している。
※服務研修の充実。「服務 は・ち・お・う・じ」服務レター回覧の徹底。
- ⑥ 生徒、保護者の立場や受け止め方に配慮した、態度、言葉遣いなど日頃から意識するように働きかけトラブル防止、リスク管理の徹底を行っていく。そのことで、教員がかけるエネルギーを生徒の指導支援に向けていく。

5 保護者・地域と連携し、入学させてよかったと実感できる学校を目指す

- ① 学校、保護者とのコミュニケーション、地域との連携は本校にとって大変重要である。次年度も積極的な情報発信、情報交換交流の場の設定し、開かれた学校として保護者、地域連携を目指す。
- ② 学校運営協議会を月1回と打ち合わせ会（月1回）実施し、学校運営とともに学校支援活動を実施した。音楽祭対応、修学旅行対応、福島移動教室対応、感染症対応、学校評価、ボランティア活動、不登校生徒支援、浅川中作品展（アサテン）等において学運協と協議、連携して教育活動を進めることができた。
- ③ 学校運営協議会支援部と連携し、地域人材を活用し、授業や部活動、検定（漢字検定、英語検定）、環境整備等の充実を図ることができた。
- ④ 部活動参加生徒をはじめ、地域行事に生徒を積極的に参加させていく。

6 生徒・職員の健康安全

- ① 音楽祭間にインフルエンザによる学級閉鎖があったが、コロナウイルス感染も含め大きな広がりには防ぐことができた。今後もより一層の感染防止意識を高めなければならない。今年度も病気やケガ等の対応についても医療機関や保護者、管理職への報告・連絡が円滑にできた。適正な保健室運営ができた。
- ② スクール・サポート・スタッフを効果的に活用し、教員の負担が軽減され、働き方改革が進んだ。
- ③ 勤務時間の管理、業務内容の整理と偏りの改善、行事の削減、見直し等を行う。引き続き、次年度も各分掌、学年内での適正な役割分担と教員個々のスキルアップで働き方改革を推進する。
- ④ 教職員の同僚性を高め、円滑なコミュニケーションによる職務の負担感軽減を目指し、職場内での生産性を高める努力を継続させていく。
- ⑤ 部活動の在り方に関するガイドライン沿って部活動を運営させた。教員の部活動にかける負担軽減を図ることができている。次年度以降の部活動改革に段階を追って取り組む。

7 特別支援教室運営

- ① 東京都のガイドラインに沿った特別支援教室の運営方法「浅川モデル」を定着させることができた。巡回先の中学校特別支援教室でも担任等と連携が進んだ。
今年度は教員同士の学び合い（特別支援教室巡回指導教員と通常学級の教員）をテーマに特別支援教室巡回教員による通常学級での授業を2度行い、全教職員で教員、専門員の専門性の向上を目指した研究授業、協議会を行った。また学年単位で特別な支援を求めている生徒について事例検討研修を行った。次年度、不登校生徒支援の意味も含め、オンラインによる自立活動支援を試みる。
また、80名の入級生徒への指導支援と安定した特別支援教室運営のために人材育成に力を入れていく。
- ② 特別支援教室への理解促進のために全学年でガイダンス授業を実施する。また、全ての巡回校においてもガイダンス授業を行う。